

「堀河百首」における「相模集」の受容について

渦巻 恵

はじめに

堀河百首は十六人という多人数による初の組題百首で、すでに伝本に関して、あるいは、類似表現を手がかりにした作歌研究会の存在、万葉の影響など多角的に論じられている。また、木船重昭氏により『堀河院百首和歌全釈』も刊行され、一方で初期百首についての研究が盛んにおこなわれるなど、百首歌がいかに成立しどのように継承されたか、再検討される必要があるのではないかと思われる。

さて、「作歌研究会の存在」については竹下豊氏らにより詳細に論じられているが、堀河百首は十六人の歌人が個々に題に従って歌を詠んだものの集積ではなく、詠出の際、俊頼をリーダーとして、百首のための下相談というよりはもう少し規模の大きな研究会が持たれていたことは明らかである。そしてその手本となったのが、初期百首の創始者、曾根好忠であったようである。橋本不美男・滝沢貞夫氏『校本堀河院御時百首和歌とその研究』(以下「校本」と略す)には

この百首歌が内容面で拠り所としたのは、『古今集』の世界

であり、よりおおくの点で「百首歌」の世界であったと思われる。

とあり、堀河百首との主題歌題の一致が、好忠百首に十八例、毎月集(三百六十首歌)に五十三例あることが指摘されている。また具体的に、好忠百首、毎月集、重之百首から九首が堀河百首に影響を与えたとされた。

また、川村晃生氏は、好忠が経信母から経信を経て俊頼へと影響を与えている点を論じられ、その他、竹下豊氏は、田家の素材を好忠から堀河百首が学んだ物であることを指摘されるなど、好忠と堀河百首の関係については歌材用語の選択から趣向、享受の経緯までが論じ尽くされているようである。

そこで本稿では、好忠に倣い百首歌を数度試み、後朱雀、後冷泉朝を代表する女流歌人相模に注目し、堀河百首への影響について纏めてみた。

一 直接的摂取

「校本」には相模百首と主題歌題が一致するものが四十五あることが指摘されている。

その他相模の「玉川の里」「箱根山」「波寄る」の歌が匡房・国信・顕季・俊頼に影響を与え、また、相模集や毎月集が俊頼散木奇歌集の部立に影響を与えている点も指摘されている。

以上のように、堀河百首歌人たちが詠作資料の一つに相模集も加え参照していたことは明らかである。ところが、具体的にどのような享受されたのか、百首歌人が個々に相模の歌を摂取したのか、あるいは集が堀河百首研究会のような場に供され注目されたのか、詳細は明らかではない。そこで相模集の影響が堀河百首にどの程度見られるかについて以下に纏めた。

まず、直接的な影響と考えられるものについて順次挙げていく。

①夏部における「氷室」題

堀河百首の夏部に「氷室」の題が見える。『校本』は歌題分析の際、これを次の後拾遺歌のみの歌題とする。

氷むろをよめる

なつのひになるまできえぬふゆごほり春たつかぜやよきて
ふきけん(二二一源頼実)

『平安和歌歌題索引』(注)によってもこの歌が初出であるが、実は「氷室」は相模に次のように詠まれている。

うらもなききむろのまへのさかきばはあらきあらしのかぜ
もふかじな(相模集四七一、百首歌)

くるすのひむろのこほりいつまでかむすばほれつつとけ
じとすらむ(同五三、夏の贈答)

くさふかきむろのこほりうずもれてしたにきゆともとけ
はてめやは(同五四)

相模百首（以下本稿では初事百首でなく三種の走湯百首を相模百首と呼ぶ）の成立を一〇二四年とすれば、頼実十才の時である。相模五三・五四番の贈答の年次は不明だが、頼実は六人党の一人。相模が能因とともに六人党のリーダーとしての役割を担っていたことはすでに論じられていることである。従って頼実が相模から「氷室」題を得た可能性は高いと思われる。また、俊頼の父経信も

はるも見るひむろのわたりけをさむみこやくるすののゆき
のむらぎえ(経信集八)

と詠むが、この歌はやはり初期百首の一つ和泉式部百首のみわたせばまきのすみやくけをぬるみおほはらやまのゆき

のむらぎえ(和泉式部集七二)

の影響が色濃く、経信もまた初期百首を意識し表現を取りこんでいることがわかる。『校本』によると、歌題の撰者は『今鏡』に匡房の名が挙がっているものの、実際は俊頼が担当した可能性が高いようである。先に挙げたように俊頼が相模集を見ているのであれば、この歌題も頼実または経信から採ったというより、相模百首を意識しての選択だとは考えられないだろうか。

②庭火十神楽

「庭火」を詠んだ歌は、

山人のたけるにはびのおきあかしこゑごゑあそぶ神のきね
かな(異本やをとめ)(能宣集一三〇)

にはびたくほかげにきゆるさかきばのしもはいくよかおか
むとすらん(元輔集二類本一五九)

の二首がある。両首とも神祭りを詠んでいて、「神楽歌」に源泉

があるようであるが、相模百首にも、

にはびたくかぐらのにはのいちしるくわがさかきばのさし
はやさなむ（相模集四七七）

と詠まれている。堀河百首では、「神楽」の題に「にはび」が多く詠まれている。

あまとづる神の心をとるけふやにはびのけぶりくもとなる
らん（一〇四一公実）

ちはやぶる神の心もにはびたくこよひのかぐらうけざらめ
やは（一〇四四師頼）

にはびたくあまのいはとのかみはさはあめたちからをなを
ぞうれしき（一〇四七仲実）

庭火にはとる榊葉に置霜もとけやしぬらん神の心も（一〇
五二永縁）

ひろまへのにはびのひかりあきらけくかなづるそでをみる
ぞうれしき（一〇五三隆源）

さか木とるにはびのまへにふるゆきををもしろしとや秋も
みるらん（一〇五六河内）

その他匡房も、
よをさむみせがゐのみづはこほるともにはびははるのここ

ちこそすれ（江帥集一三七）
と詠む。

「庭火」と「神楽」を歌に詠み入れているのは相模百首初出であり、堀河百首四首目の歌などは元輔歌に倣ったようにも思われるが、「神楽」題にこのように十六人中六人が「庭火」を詠むのは、やはり作歌研究会のような場で先行百首の読み合わせ

がなされ、その際に相模百首の神楽詠から「庭火」という歌語を学びとったと思われ、堀河百首の詠作方法を示唆する例として注目される。

次に、個々に相模集から表現を撰取しているものを挙げることにする。

③ながらへおもふ

あさひまつつゆばかりなるみもちてながらへおもふひと
ぞはかなき（一五五七顕季）

ほとけともかみともたのむしるしにはながらへおもふこと
をかなへよ（相模集三〇一）

『相模集全釈』によると四句は「ならべておもふ」の異文があり、『全釈』はそちらを採り、「神仏が並び揃って」と解釈するが、それならば「ならびて」とありたいところ。『校本』では顕季歌についての異同はない。他の歌に「ながらへおもふ」という表現は検索できず、顕季が相模歌を受けて詠んだ可能性は高いと思われる。顕季歌は相模の切実な願いに共鳴したのであるうか。「ながらへおもふひと」が相模を暗に指し示しているように興味深い。

④つるぶちのこま

をがさはらすぐろにやくるしたくさになづまずあるつる
ぶちのこま（一八三仲実）

そのかみもわすれぬものをつるぶちのこまかならずもあひ
みけるかな（相模集一一三）

「つるぶち」は、著名な源順の馬毛名歌合（康保三年五月五日）に、

雲間よりとぶあしはらのつるぶちは難波のあしげおひつか
むやは

いでがたみとぶあしはらのつるぶちを難波のあしげかへり
みてゆく

と詠まれていることが『相模集全釈』にも指摘されているが、
「つるぶちのこま」という続柄柄はこの二首のみ。順は言うま
でもなく好忠百首に追隨する百首を詠んでおり、順及び相模の
歌が仲実の視野に入っていた可能性は高い。

⑤ふるのの沼・沢

くちにけり人にかよはぬいそのかみふるののさはにわたす
まろばし(一四三四頭仲)

うくてよにふるののぬまのあやめぐさねかくるそではかは
くまもなし(相模集五三八)

あとたえてふるのの中のみづからとかけしにいちぢぬるる
袖かな(堀河集一一三)

「ふるののみち」は貫之、和泉などに先行例があるが、沢を
詠むのは頭仲が初出と思われる。先行する近い用例は相模の「ふ
るののぬま」のみである。後に源頭仲女である堀河も「ふるの」
を「水」とともに詠んでいる。

⑥かたむすび

あしのやのしづはたおびのかたむすびこころやすくもうち
とくるかな(一一七六俊頼)

もろともにいつかとおくべきあふことのかたむすびなるよは
の下ひも(相模集一一一・後拾遺六九五)

また基俊集にも、

あふことはかたむすびするわざもこがゆはたのひもよいつ
かとおくべき(六二・夫木一五六一一二)

と詠まれているが、他には検索できなかった。相模、基俊歌は
「かたむすび」の「かた」に逢うことの「難(し)」を掛けて、
成就しがたい恋を嘆く。一方、俊頼歌は成就した恋に転換させ
て新しみを出している。

⑦ななくりのゆ

いかなればななくりのゆのわくがごといづるいづみのすず
しかるらん(五三九基俊)

つきもせずこひになみだをわかすかなこやななくりのいで
ゆなるらむ(相模集一三八・後拾遺六四三)

「七栗の湯」は「枕草子」湯は」の条に一番に名が挙げられ
ている有名な温泉である。ただし、歌にはなじまない素材であ
ったためか、他に用例は少なく次の歌のみ。

いちぢなるいはねにいづるななくりのけふはかひなきゆに
もあるかな(経信集二四五)

いちぢなるななくりのゆもきみがためこひしやまずときけ
ばものうし(同二四六)

よのひとのこひのやまひのくすりとななくりのゆのわき
かへるらん(夫木一二四八八肥後)

経信の「いちぢ」は湯のあつた壺志郡のこと。基俊歌は比喩
として「七栗の湯」を詠んでおり、必ずしも相模歌の影響を受
けたとは断定しかねるが、経信の贈答歌より、後拾遺に入集し
た相模歌のほうが著名であったことは確かであろう。むしろ相
模によって経信らが恋に取り合わせて詠むのに対し、ねらいを

はずして詠んでいるとも考えられよう。また、基俊、肥後ともに相模歌の「わかす」から発想を得ているようにも思われる。

⑧いとどしく十花橘

いとどしく花橘ぞなつかしきむかしのひとの袖のなごりに

(公実異伝歌)

いとどしく花橘ぞなつかしきこころざしけるにほひとおも

へば(散木奇歌集二二四)

相模は百首歌に

いにしへのわすれがたきにとどしく花橘の香をやのこさ

ん(相模集四四六)

と詠み、経信は恐らくこの歌から

いとどしくわすれぬるかなにほひくるはなたちばなの風の

たよりに(経信集八三)

と詠んでいる。公実の堀河百首異伝歌は、堀河百首選定の際に切り出されたものと考えられているもの。俊頼歌との重複を指摘されている切り出しかとも想像されるが、公実、俊頼が花橘を「いとどし」と詠むのは、直接的には経信の影響である可能性もあるものの相模の先行例があることを無視できない。

⑨たなれの駒・鷹

とやかへるた駒の鷹を手にすゑてきぎす鳴くなる交野へぞ

ゆく(一〇六八永縁)

水の江のまこもいまはおひぬればたなれのこまをはなち

てぞみる(歌枕名寄七七八九紀伊)

こととはぬきにはありともうるはしききみがたなれ(手奈

礼)のことにしあるべし(万葉集八一五)

こととはぬきにもありともわがせこがたなれ(多那礼)のみことつちにおかめやも(同八一六)

のがひにもはなちやせましまこもぐさたなれのこまののど

けからぬを(相模集四四七)

「たなれ」は万葉集に見られる表現である。以後歌では相模

が初出のようで、永縁がいずれから撰取したかはわからないが、

紀伊の別詠は「たなれのこま」とあり、相模からの影響といっ

てよいかと思われる。

⑩みをうぐひす

かすならぬ身をうぐひすと思へどもなくをば人もしのばざ

りけり(五六俊頼)

しられねばみをうぐひすのふりいでつつなきてこそゆけの

にもやまにも(蜻蛉日記)

はつはるのいのりならねばよそへつつみをうぐひすのねこ

そなかるれ(相模集四二六)

たちかへりなほはるになるなげきをばみをうぐひすのおな

じえになく(成尋母集一一三)

相模歌は応和する走湯百首中三つ目の百首の二首目、初春の歌。実は俊頼は後述のように、相模の二番目の百首のやはり二首目の鶯詠からも表現を撰取しているようである。従ってやはり蜻蛉なども視野に納めつつ、直接には相模からの影響といえるように思われる。

⑪しきなみ

むらさきのしきなみよるとみるまでにたごのうらふじはな

さきにけり(二七九仲実)

しきなみはたちまさるともふきこなむ心のうちにまつのう
は風（相模集五一二）

万葉集三三五三番にも、

かしこみや かみのわたりの しきなみの よするはまへ
に： うらもなく ふしたるきみは：

と、備後において屍を見て詠んだ歌があるが、仲実が藤花題の
晴れの意識の色濃い歌にこの歌からわざわざ用語を撰取したと
は考えにくい。他に、万葉に一例、清少納言集に一例見られる
が、相模歌に詠まれた松を藤に転換させたと考えることもでき
よう。

二 間接的撰取

次に、間接的影響として、初期百首經由での相模集の受容に
ついて纏めた。

①をの十すみがま

おほはらやをののすみがまゆきふりて心ぼそげにたつけぶ
りかな（一〇七六師頼）

すみがまもそこともみえずふるゆきにみちたえぬらんをの
のさと人（一〇七七顯季）

おほはらやをののすみがまゆきふれどたえぬけぶりぞしる
べなりける（一〇七九仲実）

すみがまにたつけぶりさへをのやまはゆきげのくもとみゆ
るなりけり（一〇八一師時）

すみがまにたきこりたくゆふぐれはをのれけぶたきをの
の山人（一〇八三基俊）

小野山にけぶりたえせぬすみがまを室のやしまと思ひける
かな（一〇八四永縁）

すみがまのくちやあくらんをの山にけぶりのたかくたちの
ぼるかな（一〇八五隆源）

よもやまのふゆのけしきとなるままにをののすみがまけぶ
りたちます（一〇八七紀伊）

すまのうらにしほやくあまのけぶりかとみぞまがへつるを
ののすみがま（一〇八八河内）

みやまぎをあさなゆふなにこりつめてさむさをこふるをの
のすみやき（好忠集三六四・拾遺一一四四）

みやこにもはつゆきふればをのやまのまきのすみがまたき
まさるらん（後拾遺集四〇一相模）

小野の炭焼きを詠んだのは好忠が最初である。ところが「す
みがま」との組み合わせは、相模の後拾遺入集歌が最初。堀河
百首「炭窯」題で九首が「小野」と組み合わせるのは、「炭窯」
題を創作させた好忠の影響もさることながら、相模の影響も無
視できないであろう。

②煙たえせぬ大原の里

堀河百首の同じく「炭窯」題には、「大原」との組み合わせも
見られる。これらが、好忠や和泉式部の影響を受けている点は
すでに指摘されているところである。

としをへてつまきとりくべすみがまにけぶりをたえぬおほ
はらのさと（一〇七三公実）

み山木をやくすみがまにこりつみてけむりたえせぬおほ
らのさと（一〇八六肥後）

さびしさはふゆこそまされおほはらややくすみがまのけぶりのみして(一〇八二頭仲)

おほはらやまきのすみがま冬くればいとどなげきのかずやつもらむ(好忠集三三五)

見わたせばまきのすみやくけをぬるみおほ原山の雪のむらぎえ(和泉式部集七二)

おほはらやすみやまきたるいもをしてをの山なるなげきこらせじ(相模集三七三)

やくとのみなげきをこりてすみがまにけぶりたえせぬおおはらのさと(同四七八)

注目されるのは、相模四七八番と、公実、肥後歌の類似である。特に肥後歌は、下の句のみならず、「こる」という語も一致する。公実歌は相模歌の恋の趣を嘆老に詠み替え、むしろ好忠歌に近いが、念頭に相模歌があったことは疑いあるまい。

従って、百首にこうした題材を定着させた好忠、和泉の手柄は大きいものの、相模百首も堀河百首歌人になりに注目されていたと言えるのではないだろうか。

③埋火題

この題が好忠和泉から摂取されたものである点も指摘されている。^{注1)}

ほにいでてまだおきながらうづみびはふねならなくにこがれこそすれ(一〇九〇匡房)

いかにせんはひのしたなるうづみびのうづもれてのみきえぬべきかな(一〇九六俊頼)

うづみびのしたにうきみとなげきつつはかなくきえむこと

をしぞおもふ(好忠集三四五)

埋み火のしたにこがれしときよりもかくにくまるる折ぞわびしき(和漢朗詠集冬業平)

まじろむをおこすともなきうづみびをみつはかなくあかすころかな(和泉式部続集五六三)

他に、

ゆめにだにねばこそみえね埋火のおきみてのみぞあかしはてつる(躬恒集一二四)

うづみびにあらぬわが身も冬よにおきながらこそしたにこがるれ(相模集二七五)

うづみびもきみにもあらぬあまぶねもふゆはうきよにこがれてぞゆく(同三七四)

うづみびをよそにみるこそはかなければわれのはひとなる身を(同五六一)

がある。俊頼が「消ゆ」と詠むのは相模からでなく好忠の影響とも思われるが、匡房が「ふね」とともに詠むのは相模百首を意識したか。ただし、この歌は相模詠でなく権現の返しとされる百首。

④つらら十立春

つららは重之百首冬部に詠まれるのが初出で、肥後も初期百首特有の歌材として詠んだのであろう。他に、高遠集などにも見られるが、春の到来と共に詠むのは相模百首の影響からとも思われる。

つららぬしほそたにがはのとけゆくはみなかみよりやはるはたつらん(一四肥後)

ふゆくれればつららにみゆるいしやまの氷はかたきものとし
らなん(重之集二九〇)

うちとけぬけしきをみればふゆくさのうへのつららにみえ
わたるかな(高遠集三六七)

としをへてとづるつららもはるちかみとくればとくるもの
にざりける(定頼集一四一)

下水まだうちとけぬつららをばはるのやまべのかぜにまか
せむ(相模集二二六)

ふりてつるひとのころのしらゆきはつららにのみぞおも
ひきえぬる(伊勢大輔集五四)

水とりのつららのまくらひまもなしむべきえけらしとふの
すがごも(経信集一六五)

うらやましふりつむ雪はむらきえぬとけぬはまつのつらら
なりけり(弁乳母集九三)

行く水の音せざりせば月影をまだきゐにけるつららとやみ
む(為仲集五〇)

⑤たにがくれ

たにがくれまだゆききえぬみよしのおなじやまべにたつ
かすみかな(四二頭仲)

春きては日数へぬれどたにがくれのこれる雪は消えがたき
かな(九五紀伊)

おぼつかな誰かもるらん里とほみ谷がくれなる小田の苗代
(二三〇頭仲)

ゆききえぬたにがくれなるうぐひすはなにをきるべにはる
をしるらん(散木奇歌集四八)

おとせでたにがくれなるやまぶきはただくちなしのいろ
にざりける(重之集一一九)

はるくれればたにがくれなるうぐひすもみやこにいでてなか
んとぞおもふ(相模集二二三)

重之歌は百首歌ではないが、「春のくれつかた」という題を持
つ十首の題詠の一つ。相模歌は「みをうぐひす」の所で指摘し
たように百首の二首目の歌で「鶯」とともに詠まれ、散木集の

俊頼歌への影響が認められる。他に、道済集一九四、伊勢大輔
集一三九番にあり、後に、隆源の兄弟である大式も、

たにがくれうづもれにけることのはもこのもとならでちら
すあやなさ

と詠んでいる。

以下に紙幅の都合上初期百首歌人に詠まれ先例の少ないもの
を列挙する。

⑥ときはぎ

ときはぎのみどりはなべてかはらねどかぜのしらべぞまつ
はことなる(一三一〇肥後)

ときはぎのはなれてひとりみえつるはいつをまつとか人は
みるらん(散木奇歌集一五四四)

かなな月もみぢもしらぬときはぎによろづよかかれみねの
しらくも(新古今集七二〇元輔)

もみじせぬときはのやまのときはぎも秋はしたばぞけしき
ばむらし(惠慶集二二九)

ちはやぶるいがきのもとときはぎもあらしのかげはいと
はざりけり(相模集三六七)

⑦みつのみまき

をがさはらみつのみまきのはなれごまいとどけしきぞはる
はあれます(一八六頭仲)

なつくともいかがとるべきくさわかみみつのみまきにある
る春ごま(一八七基俊)

はるこまのいばゆるおとぞきこゆなるみつのまこもつ
ぐみぬらし(一八八永縁)

ひきかへる水のみまきのあやめぐさねにねをそへてたまと
つらぬく(散木奇歌集八三〇)

頭仲、基俊歌は次の貫之歌に拠るか。

みやこまでなつけてひくはをがさはらみつのみまきのこま
にやあるらん(古今六帖一七七貫之)

永縁歌の「はるこまのいばゆるおと」は次の惠慶「こまいは
へたり」を意識したものでらうし、「まこも」を詠むのは相模歌
に拠ると思われる。

よどのなるみづのみまきにはなちかふこまいはへたりはる
めきぬらし(惠慶集二一一)

さみだれはみづのみまきのまこもぐさかりほすひまもあら
じとぞおもふ(相模集五九四)

他に、能宣集四七一、兼盛集六一、重之集二一六、安法法師
集三五番にも。

⑧いぶきやま

あきたつといぶきのやまのやまおろしのたもとすずしくふ
きつなるかな(五六七仲実)

ひとをよよをもうらめしといぶきのもりのしたくさのしげ

きおもひに：(散木奇歌集一五二〇)

かくとだにえやはいぶきのさしもぐささしもしらじなもゆ
るおもひを(後拾遺集六一二実方)

ふゆふかくのはなりけりあふみなるいぶきのとやまゆき
ふりぬらし(好忠集四五二)

なつきぬといぶきのやまのほととぎすそそやなくなりあき
なあさなに(千穎集一九)

このごろはひとのつらさもひとりしていぶきのたけもかひ
なかりけり(相模集一五八)

いろふかきをやまのまつをおきながらなにあだごとをいふ
きなるらむ(同一五九)

他に紫式部集八一番にも見られる。

以上から、相模歌が堀河百首に個々に撮取されたのではなく、
初期百首歌人として多大な影響を与えたことは明らかであろう。

さらに気付くのは、特殊な用語が初期百首歌人を含め、安法法
師を始め河原院周辺歌人にも共通して詠まれていることである。

かつて、犬養康氏は「河原院の歌人達」という御論考の中で、
安法法師を中心に順、惠慶、重之、兼澄、道濟、元輔らが、宮

廷世俗と別個の小世界を営んでいたとされ、河原院文化圏の存
在を示された。好忠百首もまた、彼らにより伝播され、彼らと

接触を持つ重之女、保憲女、和泉、相模らの女流百首も生まれ
たのであった。安法没後、能因もまた、河原院に出入りし、安

法女に代詠を依頼されたりもしている。好忠によって生まれた
新風は河原院で醸成され、能因、相模らや後代の歌人に受け

継がれ、経信を経て堀河百首において結実したかの印象を強く

受ける。これまでは、好忠と俊頼の詠風の類似から、好忠と堀河百首を直結して論じる傾向にあったように思われるが、本稿ではその線上に相模を加えてみた。なお、河原院周辺歌人と堀河百首については別に論じる予定である。

- 注1 『笠間注釈叢刊』(平9・1)
注2 『堀河百首』の成立事情とその一性格―堀河百首研究(一)―(女子大文学36号 昭60・3) 鳥井千佳子氏「堀河百首」とその背景―周辺の歌学書との関連における―(中古文学36号 昭61・3)
注3 笠間書院(昭51・3)
注4 川村晃生氏「私家集と歌壇―堀河院歌壇をめぐって―」(王朝私家集の成立と展開)平4)
注5 竹下豊氏「堀河百首の自然」(王朝和歌の世界)昭59)
注6 注4論文。竹下氏「晴の歌集―堀河百首歌人の家集を中心に―」(王朝私家集の成立と展開)平4) 同氏「堀河百首」の名所歌枕詠―堀河百首研究(五)―(女子大文学40号 平1・3) 同氏「源俊頼」(和歌文学講座第五巻)平5)
注7 瞿麦会(昭61)
注8 川村氏「撰関期和歌史の研究」(平3) など。
注9 武内はる恵、林マリヤ、吉田ミズズ氏「私家集全釈叢書12」(平3) 注4に同じ。
注10 注4に同じ。
注11 川村氏注4論文、竹下氏注2論文。
注12 国語と国文学(昭和42・10)

付記 本稿は、平成九年筑波大学国語国文学会において口頭発表したものを纏めたものである。発表に際して石埜敬子先生、犬井善寿先生をはじめ多くのご教示を賜りましたことを深謝申し上げます。

(うずまき めぐみ 埼玉短期大学講師)